

壁塗り代換と餅くるみ交替の両方が可能な動詞

—「巻く」と「埋める」の分析—

川野靖子

1. はじめに

本稿では、格体制の交替を起こす動詞の中でも珍しい振る舞いをみせる「巻く」と「埋める」を取り上げ、その振る舞いの背景を分析する。以下で、格体制の交替という現象を説明しつつ、「巻く」や「埋める」の振る舞いのこういった点が特殊であるのかを述べたい。

次の(1)や(2)が示すように、「塗る」や「満たす」等の動詞は、～ニ～ヲという格体制と～ヲ～デという格体制の交替を起こす。この現象は「壁塗り代換」と呼ばれ、広く知られている(奥田1976、奥津1981等)。

- (1)a. 壁にペンキを塗る
- b. 壁をペンキで塗る
- (2)a. コップに水を満たす
- b. コップを水で満たす

また、壁塗り代換とよく似た別の交替として、「くるむ」や「包む」等の動詞が起こす、次のような現象(餅くるみ交替)も指摘されている(川野1997, 2004, 2006, 2009)。

- (3)a. 桜の葉に餅をくるむ
- b. 餅を桜の葉でくるむ
- (4)a. 風呂敷に本を包む
- b. 本を風呂敷で包む

壁塗り代換と餅くるみ交替は、～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の交替であるとい

う点で共通するが、交替の際の格成分の対応の仕方が異なっている。以下の(5)と(6)に点線で示すように、壁塗り代換では二格句とヲ格句、ヲ格句とデ格句が対応するのに対し、餅くるみ交替では二格句とデ格句、ヲ格句とヲ格句が対応するのである^{*1}。

(5)壁塗り代換

- a. 壁に ペンキを 塗る
 ⋮ ⋮
 b. 壁を ペンキで 塗る

(6)餅くるみ交替

- a. 桜の葉に 餅を くるむ
 ×××××
 b. 餅を 桜の葉で くるむ

さて、壁塗り代換と餅くるみ交替のどちらが成立するかは動詞ごとに決まっており、たとえば「塗る」は壁塗り代換を、「くるむ」は餅くるみ交替を起こす。ところが興味深いことに、中には、壁塗り代換と餅くるみ交替の両方を成立させる動詞がある。それが、本稿で取り上げる「巻く」と「埋める」である。用例を以下に示す^{*2}。

(7)巻く^{*3}

[壁塗り代換]

- a. 包丁に さらしを 巻く
 ⋮ ⋮
 b. 包丁を さらしで 巻く

[餅くるみ交替]

- a. さらしに 包丁を 巻く
 ×××××
 b. 包丁を さらしで 巻く

(8)埋める

[壁塗り代換]

- a. 穴に ごみを 埋める
 ⋮ ⋮
 b. 穴を ごみで 埋める

[餅くるみ交替]

- a. 土に 銀杏を 埋める
 ⋮ ⋮
 b. 銀杏を 土で 埋める

川野（2006）（2009）では、壁塗り代換を起こす動詞と餅くるみ交替を起こす動詞の違いについて論じたが、両方の交替を起こす動詞については取り上げていない。そこで本稿では、「巻く」と「埋める」を取り上げ、これらの動詞が両方の交替を起こす理由を考察する⁴。両方の交替を起こすというのは珍しい現象であるが、その仕組みは、「塗る」や「くるむ」といった他の交替動詞の場合と同様に、川野（2006）（2009）で指摘した原理で説明できるというのが本稿の結論である。

本稿の構成は以下のとおりである。まず次の2節において、壁塗り代換や餅くるみ交替という現象の詳細を確認する。次に3節において、川野（2006）（2009）で明らかになったことをまとめる。その後、4節で「巻く」、5節で「埋める」を分析する。最後に6節において考察をまとめ、関連する英語の現象に触れつつ、本稿の議論が今後どのように発展し得るかについても述べる。

2. 壁塗り代換と餅くるみ交替

2.1. 壁塗り代換

壁塗り代換を起こす動詞には、冒頭で挙げた「塗る」や「満たす」の他に、「敷きつめる」「散らかす」「飾る」等がある。例文を以下に挙げる。

- (9)a. 壁にペンキを塗る
 b. 壁をペンキで塗る (=(1))

- (10)a. コップに水を満たす
 b. コップを水で満たす (= (2))
- (11)a. 庭に石を敷きつめる
 b. 庭を石で敷きつめる
- (12)a. 床に雑誌を散らかす
 b. 床を雑誌で散らかす
- (13)a. テーブルに花を飾る
 b. テーブルを花で飾る

壁塗り代換の～ニ～ヲ形（壁にペンキを塗る）と～ヲ～デ形（壁をペンキで塗る）は、一見、同義にみえるが、実際にはそうではなく、前者は位置変化を表し、後者は状態変化を表すことが指摘されている（奥田1976、奥津1981等）。「塗る」を例にとると、「壁にペンキを塗る」が表すのは「壁にペンキが存在するようになる」ということ（＝ペンキの位置変化）であり、一方、「壁をペンキで塗る」が表すのは、「ペンキを伴うことで壁の様子が変化する」ということ（＝壁の状態変化）である。

これを整理すると、次のようになる。

(14)壁塗り代換

位置変化動詞文： ～ニ ～ヲ 動詞 （例：壁にペンキを塗る）

⋮ ⋮

状態変化動詞文： ～ヲ ～デ 動詞 （例：壁をペンキで塗る）

2.2. 餅くるみ交替

餅くるみ交替を起こす動詞には、冒頭で挙げた「くるむ」「包む」の他、「隠す」がある。

- (15)a. 桜の葉に餅をくるむ
 b. 餅を桜の葉でくるむ (= (3))
- (16)a. 風呂敷に本を包む
 b. 本を風呂敷で包む (= (4))
- (17)a. 布団に本を隠す
 b. 本を布団で隠す

餅くるみ交替の場合も、壁塗り代換と同じく、～ニ～ヲ形は位置変化を表し、～ヲ～デ形は状態変化を表すと考えられる。上記(15)を例にとると、

(15a)の「桜の葉に餅をくるむ」が表すのは「桜の葉が作る空間に餅が存在するようになる」ということ(=餅の位置変化)であり、一方、(15b)の「餅を桜の葉でくるむ」が表すのは「桜の葉を伴うことで餅の様子が変化する」ということ(=餅の状態変化)である。このように考えられる根拠については川野(2006)で詳しく論じたが、本稿ではそのうちの一つを以下に示す。次の(18)と(18')を比較してほしい(なお、(18')に付した#の記号は、その文が、非文法的ではないが、文脈上不自然であることを示す)。

(18)それでも寒そうだったから、毛糸で編んだ白いショールで登志子の顔を包んでから… (孤高の人)

(18')#それでも寒そうだったから、毛糸で編んだ白いショールに登志子の顔を包んでから…

～ヲ～デ形の(18)は実例であり、自然な文であると思われる。しかし、これを～ニ～ヲ形に置き換えた(18')では、「ヲ格句の事物(登志子の顔)が移動する」という解釈が強制的に読み込まれ、「登志子の顔を体から切り離して動かした」というような、文脈上不自然な文になってしまう。このことは、～ニ～ヲ形が位置変化を表すことを示している。これに対し、～ヲ～デ形の(18)では、ヲ格句の事物(登志子の顔)の移動が読み込まれない(そのため文脈上の不自然さも生じない)。これは、～ヲ～デ形の表す変化が位置変化ではなく状態変化であることを示している。

以上から、餅くるみ交替という現象は、次のように整理できる。

(19)餅くるみ交替

位置変化動詞文： ～ニ ～ヲ 動詞 (例：桜の葉に餅をくるむ)



状態変化動詞文： ～ヲ ～デ 動詞 (例：餅を桜の葉でくるむ)

3. 壁塗り代換を起こす動詞と餅くるみ交替を起こす動詞の違い

川野(2006)(2009)では、「動詞の範疇的語義には階層がある」という考えに基づいて、壁塗り代換を起こす動詞と餅くるみ交替を起こす動詞の共通点と相違点を明らかにした。以下にその内容をまとめる。

まず共通点について述べる。既に2節で見たように、「塗る」や「くるむ」等の動詞は交替(壁塗り代換、あるいは餅くるみ交替)を起こすが、一方で、

次の「付ける」や「汚す」のように、このような交替を起こさない動詞も存在する。

(20)a. 壁にペンキを付ける

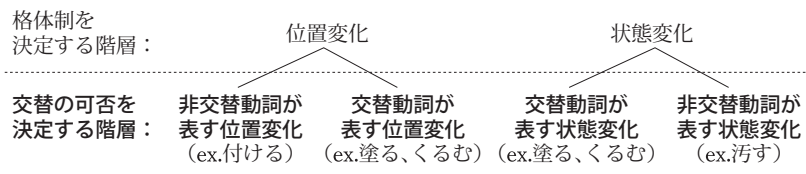
b. *壁をペンキで付ける

(21)a. *壁にペンキを汚す

b. 壁をペンキで汚す

つまり、同じ位置変化を表す動詞の中にも、交替を起こす動詞（塗る、くるむ、等）と起こさない動詞（付ける、等）があり、また、同じ状態変化を表す動詞の中にも、交替を起こす動詞（塗る、くるむ、等）と起こさない動詞（汚す、等）があるのである。この事実を踏まえ、川野（2009）では、交替の可否は「位置変化」や「状態変化」という語義の階層よりも下位の階層において決定されることを指摘した。

(22)

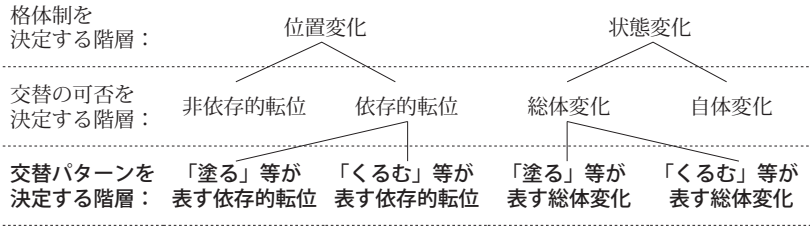


そして、この考え方に基づいて交替動詞の特徴を分析し、交替動詞の表す位置変化と状態変化が、それぞれ「依存的転位」「総体変化」として特徴づけられることや、「依存的転位」と「総体変化」のシフト⁶⁾によって交替が起こることを明らかにした。「依存的転位」とは、「一方の事物を他方の事物の形状に適応させながら位置づける（塗る、満たす、くるむ、包む、等）」または「空間の美観に影響を及ぼすようなやり方で事物を位置づける（飾る、散らかす、等）」という内容の位置変化であり、「総体変化」とは、「一方の事物を、他の事物を伴った状態にする」という内容の状態変化である。これに対し、非交替動詞はこのようなタイプの位置変化や状態変化を表さない（非交替動詞の表す位置変化と状態変化はそれぞれ、「非依存的転位」と「自体変化」として特徴づけられる）。つまり、位置変化の中でも依存的転位を表すこと、状態変化の中でも総体変化を表すことが、壁塗り代換を起こす動詞と餅くるみ交替を起こす動詞の共通点（非交替動詞との違い）ということ

になる。

次に、壁塗り代換を起こす動詞と餅くるみ交替を起こす動詞の相違点について述べる。川野（2006）（2009）では、壁塗り代換を起こす動詞と餅くるみ交替を起こす動詞の違いが決まるのは、交替の可否が決定される階層よりさらに下位の階層であると指摘した。

(23)



そして、この考え方に基づいて、「塗る」等が壁塗り代換を起こし、「くるむ」等が餅くるみ交替を起こす理由を、次のように説明した（この議論は本稿で取り上げる「巻く」や「埋める」の問題と特に深く関わるので、やや詳しく述べる）。

「塗る」等も「くるむ」等も、～ニ～ヲ形において、「一方の事物を他方の事物の形状に適応させながら位置づける」という依存的転位を表す点は共通する。しかし両者の表す依存的転位には、次のような違いがある。まず「塗る」等では、ヲ格句の事物（ex.ペンキ）がニ格句の事物（ex.壁）に合わせる形で形状適応が起こる。これに対し「くるむ」等では逆に、ニ格句の事物（ex.桜の葉）がヲ格句の事物（ex.餅）に合わせる形で形状適応が起こる。この違いが、～ヲ～デ形と交替する際の交替パターンの違いを引き起こす。具体的には、「塗る」等では「～ニ～ヲ形でニ格句だった事物（ex.壁）がヲ格句だった事物（ex.ペンキ）を伴った状態になる」という総体変化にシフトするのに対し、「くるむ」等では「～ニ～ヲ形でヲ格句だった事物（ex.餅）がニ格句だった事物（ex.桜の葉）を伴った状態になる」という総体変化にシフトする。前者のシフトは壁塗り代換の交替パターンを実現し、後者のシフトは餅くるみ交替の交替パターンを実現する。

- (24) ~ニ~ヲ塗る : ヲ格の事物(ペンキ)がニ格の事物(壁)の形状に適応
 ~ニ~ヲくるむ : ニ格の事物(桜の葉)がヲ格の事物(餅)の形状に適応

~ヲ~デ形

デ格

ヲ格

また、~ヲ~デ形の側からは、次のように説明される。「塗る」等も「くるむ」等も、~ヲ~デ形において総体変化を表す点で共通する。しかし、「塗る」等が表す総体変化と「くるむ」等が表す総体変化には次のような違いがある。まず、「塗る」等の表す総体変化は、「ヲ格句の事物(ex.壁)がその表面や内部にデ格句の事物(ex.ペンキ)を伴った状態になる」というものであり、「ヲ格句の事物>デ格句の事物」という大小関係で総体変化が起こる。これに対し「くるむ」等の表す総体変化は、「ヲ格句の事物(ex.餅)がそのまわりにデ格句の事物(ex.桜の葉)を伴った状態になる」というものであり、「デ格句の事物>ヲ格句の事物」という大小関係で総体変化が起こる。両者のこうした違いが、~ニ~ヲ形と交替する際の交替パターンの違いを引き起こす。具体的には、「塗る」等では「~ヲ~デ形でヲ格句だった事物(ex.壁)にデ格句だった事物(ex.ペンキ)が存在するようになる」という位置変化へのシフトになり、一方「くるむ」等では「~ヲ~デ形でデ格句だった事物(ex.桜の葉)にヲ格句だった事物(ex.餅)が存在するようになる」という位置変化へのシフトになる。前者のシフトは壁塗り代換の交替パターンを実現し、後者のシフトは餅くるみ交替の交替パターンを実現する。

- (25) ~ヲ~デ塗る : ヲ格の事物(壁) > デ格の事物(ペンキ)
 ~ヲ~デくるむ : デ格の事物(桜の葉) > ヲ格の事物(餅)

~ニ~ヲ形

ニ格

ヲ格

以上が川野(2006)(2009)で論じたことである。これを踏まえ次節からは、「巻く」と「埋める」が壁塗り代換と餅くるみ交替の両方を可能とする理由を分析する。なお、「巻く」と「埋める」とでは現象の背景が異なると考えられるので、それぞれ分けて分析し、4節で「巻く」、5節で「埋める」を取り上げることとする。

4. 巻く

4.1. 現象の整理

「巻く」が壁塗り代換と餅くるみ交替の両方を成立させることを、もう一度確認しておく。

(26) 壁塗り代換

- a. 包丁に さらしを 巻く
 ⋮ ⋮
b. 包丁を さらしで 巻く

(27) 餅くるみ交替

- a. さらしに 包丁を 巻く^{*6}
 ><
b. 包丁を さらしで 巻く

また、実際の用例をもとに、「巻く」の交替例を以下に追加して示す。

- (28)a. 尚、炭も炭団も入手困難のため、私のうちでは冬期防寒のため、平たい石または瓦を煮物などするとき竈で焼いて古新聞紙に包みまして、それを布で巻いて背中に入れました。 (黒い雨)
b. それに布を巻いて
c. それを布に巻いて

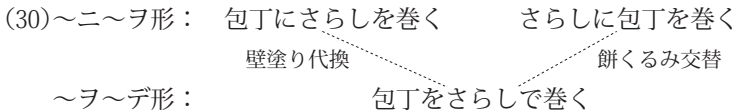
(b-a : 壁塗り代換、c-a : 餅くるみ交替)

- (29)a. そして、『裸の王様』と書いたテーブルにまっすぐ歩みよると、いちばんうえにあった一枚をすばやくとり、山口にみえないよう床にかがんで、それまで新聞に巻いてもっていた画をほどいた。その二枚をもって壇にもどったとき、ちょうど審査が完了したらしく、大田氏を先頭に審査員一同がどやどやともどってきた。 (裸の王様)
b. 新聞を巻いてもっていた画

c. 新聞で巻いてもっていた画

(a-c: 餅くるみ交替、b-c: 壁塗り代換)

ところで、上記(26)と(27)をよく見ると、異なるのは～ニ～ヲ形の(26a)と(27a)であり、～ヲ～デ形の(26b)と(27b)は共通である(実際の用例をもとにした(28)(29)についても同じことがいえる)。つまり、「巻く」の交替は次のように整理できるといえる。



このことを押さえた上で、以下では、「巻く」が上記(30)のような振り舞いをみせる理由を分析する。

4.2. 「～ニ～ヲ巻く」の特徴

まずこの4.2節では、～ニ～ヲ形の側から分析を行う。「巻く」の～ニ～ヲ形には、「包丁にさらしを巻く」と「さらしに包丁を巻く」の二つがあるが⁷⁾、それらの交替形である～ヲ～デ形は、「包丁をさらしで巻く」という共通の文になる。なぜこのようになるのだろうか。

はじめに、～ニ～ヲ形から～ヲ～デ形への交替の仕方がどのように決まるのかを、もう一度確認しておきたい。3節で述べたように、壁塗り代換を起す「塗る」等の動詞は、～ニ～ヲ形において、ヲ格句の事物がニ格句の事物に形状適応することを表すのであった。このことは、これらの動詞が、変形の容易な事物(たとえば「ペンキ」や「水」等)をヲ格句にとりやすいことや、「石」のような変形が容易とは言えない事物をヲ格句にとる場合には、一個の物体ではなく複数の物体の集合という解釈になることから分かる。

(31)壁にペンキを塗る

(32)コップに水を満たす

(33)バケツに石を満たす (複数の石の集合)(34)庭に石を敷きつめる (複数の石の集合)

また、餅くるみ交替を起す「くるむ」等の動詞は、逆に、ニ格句の事物

の側がヲ格句の事物に形状適応することを表すのであった。このことは、これらの動詞が、変形の容易な事物（たとえば「桜の葉」や「風呂敷」）を二格句にとりやすいことや、「厚い鉄板」のような変形が容易とは言えない物体であっても二格句に現れると変形が強制的に読み込まれることから分かる。

(35)桜の葉に餅をくるむ

(36)風呂敷に本を包む

(37)厚い鉄板に本を包む

このように、「ヲ格句の事物が二格句の事物の形状に適応する」ことを表す動詞（塗る、等）は壁塗り代換のパターンで～ヲ～デ形と交替し、逆に、「二格句の事物がヲ格句の事物の形状に適応する」ことを表す動詞（くるむ、等）は餅くるみ交替のパターンで～ヲ～デ形と交替する。

以上を踏まえて、「どちらの事物がどちらの事物に形状適応するか」という観点から「～ニ～ヲ巻く」を見てみると、次の(38)の場合はヲ格句の事物（さらし）が二格句の事物（包丁）に形状適応するという意味になり、(39)の場合は、逆に、二格句の事物（さらし）がヲ格句の事物（包丁）に形状適応するという意味になっている。

(38)包丁にさらしを巻く

(39)さらしに包丁を巻く

つまり、「巻く」は、形状適応を伴う位置変化（依存的転位）を表すという点では「塗る」や「くるむ」といった他の交替動詞と共通するが、二格句とヲ格句の二つの事物のうち、どちらがどちらに適応するのかに関しては無指定なのである。そして、(38)のようにヲ格句の事物（さらし）が二格句（包丁）の事物に形状適応する場合は、「塗る」等の場合と同様、壁塗り代換のパターンで～ヲ～デ形と交替することになり、「包丁をさらしで巻く」という～ヲ～デ形の文が出来上がる。一方、(39)のように二格句の事物（さらし）がヲ格句の事物（包丁）に形状適応する場合には、「くるむ」等の場合と同様、餅くるみ交替のパターンで～ヲ～デ形と交替することになり、結果として「包丁をさらしで巻く」という、先ほどと共通の～ヲ～デ形の文が出来上がることになるのである。

4.3. 「～ヲ～デ巻く」の特徴

続いて今度は、～ヲ～デ形の側から分析を行う。「～ヲ～デ巻く」（包丁を

さらしで巻く)には、交替形として二つの「～ニ～ヲ巻く」(包丁にさらしを巻く/さらしに包丁を巻く)が存在するが、なぜこのようになるのだろうか。

ここでもまず、～ヲ～デ形から～ニ～ヲ形への交替の仕方を確認しておきたい。3節で述べたように、壁塗り代換を起こす「塗る」「満たす」等の動詞は、～ヲ～デ形において、「ヲ格句の事物>デ格句の事物」という大小関係で総体変化が起こることを表すのであった。たとえば「壁をペンキで塗る」では、必ずしも「壁」の隅々まで「ペンキ」が塗られている必要はなく、ペンキの付着していない部分があってもよい。また「コップを水で満たす」の場合は、コップが外側、水が内側という関係になるので、やはり「ヲ格句の事物(コップ)>デ格句の事物(水)」という大小関係として解釈できる。

これに対し、餅くるみ交替を起こす「くるむ」「包む」等の動詞は、逆に、「デ格句の事物>ヲ格句の事物」という大小関係で総体変化が起こることを表すのであった。たとえば「餅を桜の葉でくるむ」や「本を風呂敷で包む」では、「桜の葉」や「風呂敷」が、「餅」や「本」を外側からすっぽり囲むような空間を作って「くるんで(包んで)」いることになる。

このように、「ヲ格句の事物>デ格句の事物」という大小関係を指定する動詞(塗る、等)は壁塗り代換のパターンで～ニ～ヲ形と交替し、逆に、「デ格句の事物>ヲ格句の事物」という大小関係を指定する動詞(くるむ、等)は餅くるみ交替のパターンで～ニ～ヲ形と交替する。

以上を踏まえて、二つの事物の大小関係という観点から「～ヲ～デ巻く」を見てみると、おもしろいことに、この大小関係がどちらにも解釈できることに気づく。「包丁をさらしで巻く」という出来事を考えた場合、必ずしも包丁の刃先から柄の端までの全体がすっぽり隠れてしまう必要はなく、さらしから出ている部分があってもよいだろう。よって「ヲ格句の事物(包丁)>デ格句の事物(さらし)」と解釈できる⁸⁾。しかし、同時に、同じ状態の包丁であっても、見方を変えると、ヲ格句の事物(包丁)のまわりにデ格句の事物(さらし)があるという見方ができる。このように見れば、包丁が内側、さらしが外側、ということから、今度は、「デ格句の事物(さらし)>ヲ格句の事物(包丁)」という大小関係として解釈できるのである⁹⁾。前者の見方に立てば、「塗る」等と同様、壁塗り代換のパターンで～ニ～ヲ形と交替することになり、「包丁にさらしを巻く」という～ニ～ヲ形の文が出来上がる。後者の見方に立てば、「くるむ」等と同様、餅くるみ交替のパターンで

～ニ～ヲ形と交替することになり、先ほどとは異なる、「さらしに包丁を巻く」という～ニ～ヲ形の文が出来上がることになる。

以上のように、「巻く」は壁塗り代換と餅くるみ交替の両方を起こすという珍しい振る舞いをみせるが、その仕組みは、「塗る」や「くるむ」といった他の交替動詞の場合と同様に、3節で述べた原理で説明できるのである。

5. 埋める

「埋める」も「巻く」と同じく、壁塗り代換と餅くるみ交替の両方を起こすが、その背景は「巻く」とは異なると考えられる。4節で論じたように、「巻く」の場合は、「巻く」という一つの出来事において、形状適応の方向が無指定であることや、大小関係に関して二通りの見方が成り立つことが、二種類の交替を成立させる要因となっていた。これに対し「埋める」の場合は、出来事の異なる二つの「埋める」が存在し、それに対応して二つの交替が存在するのだと考えられる。以下でこのことを詳しくみる。

5.1. 壁塗り代換を起こす「埋める」

まず、「埋める」には、「穴などの空間に物などを入れていっぱいにする」という意味の「埋める」がある。この意味の「埋める」は次のように、壁塗り代換のパターンで交替を起こす。

(40)a. 穴に ごみを 埋める

⋮ ⋮

b. 穴を ごみで 埋める

(41)a. 昼まえ、彼はようやく原稿用紙の罫目に文字を埋めはじめ、一枚半を書いたところで、頼んでおいた笹蕎麦がきたことを告げられた。
(楡家の人びと)

b. 原稿用紙の罫目を文字で埋めはじめ

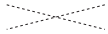
ここで注目されるのは、「穴などの空間に物などを入れていっぱいにする」という意味が、壁塗り代換の動詞である「満たす」に似ているという点である。そして実際、この意味の「埋める」が壁塗り代換のパターンで交替を起こす理由は、3節で見た「満たす」の場合と同様に説明できる。まず、この意味の「埋める」では、～ニ～ヲ形における形状適応の方向が、「ヲ格句の

事物（物など）が二格句の事物（穴などの空間）の形状に適應する」という形になる。よって、壁塗り代換のパターンで～ヲ～デ形と交替することになる。また、～ヲ～デ形における二つの事物の大小関係は、「ヲ格句の事物（穴などの空間）>デ格句の事物（物など）」という関係になる。よって、壁塗り代換のパターンで～ニ～ヲ形と交替することになるのである。

5.2. 餅くるみ交替を起こす「埋める」

次に、「埋める」にはもう一つ、「物などを別の物の下や中に入れて見えなくする」という意味がある。この意味の「埋める」は次のように、餅くるみ交替のパターンで交替を起こす。

(42)a. 土に 銀杏を 埋める^{*10}



b. 銀杏を 土で 埋める

(43)a. 或る夕方、私は再びそのヴィラまで枯葉に埋まった山径を上って行った。^{*11} (美しい村)

b. 枯葉で埋まった山径

この「物などを別の物の下や中に入れて見えなくする」という意味は、「満たす」ではなく、餅くるみ交替を起こす「くるむ」や「包む」に似ている。そして実際、この意味の「埋める」が餅くるみ交替のパターンで交替を起こす理由は、3節で見た「くるむ」や「包む」と同じように説明できる。まずこの「埋める」の場合、～ニ～ヲ形における形状適應の方向が、「二格句の事物（土）がヲ格句の事物（銀杏）の形状に適應する」という形になる。よって、餅くるみ交替のパターンで～ヲ～デ形と交替することになる。また、～ヲ～デ形における二つの事物の大小関係は、「デ格句の事物（土）>ヲ格句の事物（銀杏）」という関係になる。よって、餅くるみ交替のパターンで～ニ～ヲ形と交替することになるのである。

6. まとめと今後の課題

本稿では、壁塗り代換と餅くるみ交替の両方を成立させる動詞「巻く」と「埋める」を取り上げた。両方の交替を成立させるというのは珍しい現象であるが、その仕組みは「塗る」や「くるむ」といった他の交替動詞の場合と

同様に、川野（2006）（2009）で指摘した原理で説明できることが示せたと思う。

最後に、関連する英語の現象について触れておきたい。英語にも、壁塗り代換 (locative alternation)、及び、餅くるみ交替に相当する現象が存在するが、さらに、英語にもやはり、壁塗り代換と餅くるみ交替の両方を起こす動詞が存在する。

- (44)a. He wrapped shiny paper around a present.
 b. He wrapped a present with paper.
 c. He wrapped a present in paper. (Iwata 2008, p.101(1))

上記(44a)と(44b)は壁塗り代換であり、(44c)と(44b)は餅くるみ交替である。つまり、wrap という動詞は壁塗り代換と餅くるみ交替の両方を起こすのである。壁塗り代換や餅くるみ交替という現象が存在するというだけでなく、壁塗り代換と餅くるみ交替の両方を起こす動詞が存在するという点も日英両言語で共通しており、非常に興味深い。

ただし、wrap に近い意味を持つと思われる日本語の「包む」は、餅くるみ交替しか起こさないというように、日英語の現象は細部まで完全に一致するわけではない。その背景としては、個々の動詞の意味にずれがあることや、格の体系が両言語で異なること（たとえば、(44a)の around と(44c)の in は、日本語ではどちらも「に」になる）などが可能性として考えられるだろう。こうした対照言語学的な観点からの分析も、今後行いたいと考えている。

註

- * 1 壁塗り代換や餅くるみ交替を起こす動詞には自動詞もある（自動詞の場合は「コップに水が満ちる／コップが水で満ちる」のように、～ニ～ガと～ガ～デの交替になる）。本稿では他動詞の例を中心に議論を進めるが、本稿の議論は自動詞にもそのまま当てはまるものである。
- * 2 実際の用例については 4 節と 5 節で示す。
- * 3 定延(1990, p.62)は、「巻く」が
- (i) さらしを包丁に巻く
 (ii) 包丁をさらしに巻く
 (iii) 包丁をさらしで巻く
- の三つのパターンに現れることを指摘している。このうち、(i)と(iii)が壁塗り代換、(ii)と(iii)が餅くるみ交替の関係にある（定延1990は主に(i)と(ii)の関係について

論じている)。

- * 4 他動詞の「埋める」と同様、自動詞の「埋まる」も、壁塗り代換と餅くるみ交替の両方を起こす。

- (i) a. 穴にごみが埋まる
 b. 穴がごみで埋まる (壁塗り代換)
 (ii) a. 土に銀杏が埋まる
 b. 銀杏が土で埋まる (餅くるみ交替)

そしてその理由も、本稿が5節で述べる、「埋める」が両方の交替を起こす理由と同じように分析できると考えられる。

- * 5 ここでいうシフトとは、「ある意味類型として解釈される出来事が、見方を変えると別の意味類型としても解釈できる」という、「意味タイプのシフト」である。
 * 6 (27)の名詞「包丁」を「腕」に換えると、～ニ～ヲ形が不自然になる。

- (27') a. #さらしに腕を巻く
 b. 腕をさらして巻く

これは、2節の(18)(18')で述べたように、位置変化動詞文である～ニ～ヲ形ではヲ格句の事物(腕)の移動が強制的に読み込まれるためである。

既に2節で述べたように、壁塗り代換や餅くるみ交替の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形は、互いに異なる意味類型に属する(～ニ～ヲ形は位置変化を表し、～ヲ～デ形は状態変化を表す)。当然、意味役割も異なるので、生起できる名詞の種類にも異なりが生じるのである。先の(18)(18')や上記(27')、及び、後述する注10の(42')はその例であるといえる。

- * 7 「巻く」の～ニ～ヲ形に「包丁にさらしを巻く」と「さらしに包丁を巻く」の二つがあることについては、4.3節を参照。
 * 8 これは、「壁をペンキで塗る」における「壁」と「ペンキ」の関係と同様である。ここで重要な点は、「包丁をさらしでくるむ(包む)」等の場合においては、「くるむ(包む)」という動詞の意味として、包丁がすっぽりさらしで覆われてしまうことが要求されており、「ヲ格句の事物(包丁) > デ格句の事物(さらし)」という解釈が成り立たないという点である。このことが、「塗る」や「巻く」等が壁塗り代換を可能とし、「くるむ」や「包む」等が壁塗り代換を可能としないことの原因であるといえる。
 * 9 これは、「包丁をさらしでくるむ(包む)」における「包丁」と「さらし」の関係と同様である(「包丁をさらしでくるむ(包む)」の場合も、必ず「包丁が内側、さらしが外側」という関係になる)。ここで重要な点は、「塗る」等の場合は「内側・外側」という関係が必須でなく(たとえば、「壁をペンキで塗る」といった場合、壁の全ての面が塗られる必要はなく、一面のみでもよい。そしてその場合、「壁」と「ペンキ」は内側・外側といった関係にはない)、したがって「塗る」という動詞の意味として「内側・外側」の関係を表してはいないという点である(「満たす」の場合は、内側・外側の関係を表すが、「巻く」や「くるむ」「包む」等とは逆に、デ格句の事物(水)が内側、ヲ格句の事物(コップ)が外側になる)。このことが、「巻く」や「くるむ」「包む」等が餅くるみ交替を可能とし、「塗る」や「満たす」等が餅くるみ交替を可能

としないことの理由であるといえる。

*10 (42)の名詞「土」を「土の中」に換えると、～ヲ～デ形が不自然になる。

(42')a. 土の中に銀杏を埋める

b. #銀杏を土の中で埋める

これは、状態変化動詞文である～ヲ～デ形のデ格句は[材料]の意味役割を持つのに
対し、「～の中」という空間を表す語句を付けた名詞は[材料]とは解釈できないからで
ある(「土の中で」の場合、[材料]ではなく、[動作場所]の解釈になる。詳しくは川野
2006を参照のこと)。

*11 (43)は、「埋める」に対応する自動詞「埋まる」の例である。

引用文献一覧

- 奥田靖雄 (1976) 「言語の単位としての連語」『教育国語』45, 麥書房
- 奥津敬一郎 (1981) 「移動変化動詞文—いわゆる spray paint hypallage について—」『国語学』127, 国語学会
- 川野靖子 (1997) 「位置変化動詞と状態変化動詞の接点—いわゆる「壁塗り代換」を中心に—」『筑波日本語研究』2号, 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 川野靖子 (2004) 「桜の葉に餅をくるむ」と「餅を桜の葉でくるむ」—壁塗り代換との関連性—」『香椎瀉』50号, 福岡女子大学国文学会
- 川野靖子 (2006) 「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象—格成分の対応の仕方—」『日本語の研究』第2巻1号(『国語学』通巻224号), 日本語学会
- 川野靖子 (2009) 「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞—交替の可否を決定する意味階層の存在—」『日本語の研究』第5巻4号(『国語学』通巻239号), 日本語学会
- 定延利之 (1990) 「移動を表す日本語動詞述語文の格形表示と、名詞句指示物間の動静関係—「弾が的に当たる」と「的が弾に当たる」、「弾を的に当てる」と「的を弾に当てる」—」『言語研究』98, 日本言語学会
- Iwata, Seiji 2008. *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

用例出典『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』(1995年)に収録された以下の作品：井伏鱒二「黒い雨」、開高健「裸の王様」、北杜夫「楡家の人びと」、新田次郎「孤高の人」、堀辰雄「美しい村」